

緑の風

MIDORI NO KAZE

E-mail ● tamajitiken1972@space.ocn.ne.jp
URL ● <http://www.tamaken.org/>

10月号 vol.197

2016年9月28日

●編集
NPO法人
多摩住民自治研究所
日野市神明3-10-5
エスプリ日野103 〒191-0016
TEL : 042-586-7651
FAX : 042-514-8096



『1989日21時間9分49秒』（2016年8月20日、福島県三春町環境創造センター『コミュタン福島』の展示 [3.11クロック] 撮影：妹尾）

【地域包括ケアの現状と課題】 地域の人たちを支えるために
「全国自治体学校 in 神戸」レポート

【沖縄つうしん vol.8】 おきなわ自治研究所設立を目指して
——第1回 おきなわ地方自治の学校を開催

タマの風邪	神子島 健	2
タマの風 vol.40 「ローカルと普遍」	神子島 健	3
【地域包括ケアの現状と課題】 地域の人たちを支えるために お話：株式会社ラピオン代表取締役 柴田 三奈子さん		6
自治体学校in神戸 リポート	事務局	13
沖縄つうしん vol.8 おきなわ自治研究所設立を目指して — 第1回 おきなわ地方自治の学校を開催	湧田 廣	18
書籍の紹介 『Q&A 辺野古から問う日本の地方自治』	神子島 健	20
多摩研第一回地方自治ゼミナール 受講生の声		22
◆財政研究会リポート◆ 第31回学習会 多摩地域の長期総合計画を見る		25
8月の活動ほか		30



毎夏、多摩市の恵泉女学園大学で開催してきた「福島キッズ リフレッシュ&エコキャンプ」が4年目を迎え、今年はこれまで交流してきた福島の人たちと再会し、現在の思いなどをお聞きしながら、今後の支援のかたちを見つめようと、いわき市上三坂、檜葉町、富岡町、三春町をスタッフで訪ねました。

今月号の表紙の写真「3.11クロック」は、三春町に新たに建設された環境創造センター『コミュタン福島』の展示の一つで、大地震発生(2011年3月11日14時45分)から現在までの時間のカウントがディスプレイされています。

この環境創造センターは、放射線に関する展示や体験プログラムを通して、放射線や環境問題を身近な視点から正しく知り、県民がそれぞれの立場から福島の未来を考え、創り、発信するきっかけとなる場を目指していますとガイドの方は説明してくれたのだが、「広島を平和記念資料館と合わせて見たいですね」と、つい口からこぼれ

てしまいました。

福島第二原子力発電所(写真上)のある富岡町には、廃炉国際共同研究センターが建設中で、平成29年の運用開始を予定しており、ほかにも檜葉町の遠隔技術開発センターなど、各種研究開発や産業創出拠点の整備が進んでいます。

その一方で、自主避難されている方々への住宅無償提供の打ち切りを決めた福島県。東京電力福島第一原子力発電所では、この間の相次ぐ台風の大雨で、護岸に近い敷地の地下水が急激に増加しているという。

「語り人(かたりべ)」とは、私たちの声を聞いてくださったみなさん一人ひとりのことです。私たちの声を周りの人に伝えてください。それが私たちの、一番の願いです」という「富岡町3.11を語る会」代表の青木淑子さんの言葉がずっと頭の中で響いています。目に見える復興のかたちと見えにくいものへの感受力が常に問われています。

(文責・妹尾)

たまの風邪

神子島 健

(かこしま・たけし)

九 月上旬の或る日のこと、
多摩研事務所にて、夕方
吾輩は珍しく、机の下でぐっ
たりしていた。残暑とクーラー
との板挟みの中で、夏風邪に
やられたらしい。

今日の昼は事務局のノゾミ
さんしかおらニヤかったので、
電話が鳴るとき以外は物静か

だったにや。もつとも、まわり
が静かすぎるこういう日は、
PCのキーボードをカタカタ
打つ音や、はかどらぬ作業に
ブツブツ独り言をいう声だっ
たりがいつもより耳につくも
のである。

それはさておき、本日は『緑
の風』の編集会議にやのだ。普
段、会議の日ともなると、吾輩
が眠ろうとしても眠れニヤい
ほど、雑談とムダ話と、あ、あ
と一応会議の話でやかましい
のであるにや。ところが今日
に限って、始まる時間になっ
ても物静かにやので、また吾
輩ウトウトする。

しばらくして、ノゾミさん
以外の人の気配をなんとなく
感じたので、まだ少し重いま
ぶたを開けてみると、編集長
が来ていた。もうしばらくし
て坊主頭が来た。ノゾミさんが、

「今日はこの三人だけなんで
す」と申し訳なさそうに説明す
る。

編集長いわく、「この夏の多
摩研は忙しすぎたねえ。お盆
休みで業務日数が少ないのに、
七月後半から、『緑の風』(八月
号)発行、九月号の参院選座談
会もその時期に収録、翌週は
自治体学校in神戸、八月に入っ
て『緑の風』九月号の編集をし
つつ、財政分析講座、そして今
回初めての試み、「地方自治ゼ
ミナール」の開催。そして九月
号を印刷・発行したと思っ
たら息つく間もなく次号の会議
(今日)だからねえ」

その事務をさばいた側のノ
ゾミさん、「そうなんです。そ
れで事務局のみなさんも体調
を崩したり、先延ばしにして
いた別の用事に行ったり、で、
今日は欠席なんです」

事務局員以外のほかの編集
委員のみなさんも、事情は似
たり寄ったり。この暑さと忙
しさと体調を崩すか他の用事
と重なってしまったわけであ
る。「今日は珍しくタマもぐっ
たりしてますよ」とノゾミさ
ん。

ということ、今月の『緑の
風』は、ここ最近にしては珍し
く、全三〇頁と控えめの構成
になっているにや。ご容赦く
ださい。



暑さでグターつとするネコの写真、吾輩ではニヤい。
([たまの風]vol.15の再掲)

ローカルと普遍

神子島 健

(かごしま・たけし)



vol.40

「ロ

ーカルなものがある価値を持つことがあ
るのだろうか」、さらには、
「ローカルなものが普遍的な価値をもつとすれば、それはどのような条件で可能になるだろうか」。吾輩はここ数日、こんなことを考えているにや。前頁の「風邪」から十数日ほど経ち、体調はとつくに万全だにや。ちなみにこういう話をする場合、「普遍」の定義が問題になるのだが、それは追々考える。

この話には前段があつて、この夏吾輩は、新潟県の中越地方、それから東北の太平洋岸に「出張」してきて、いろいろと考えるとところがあつたのだにや。

先月号に登場した近所の孤猫(ネコの孤児)のコロちゃん
のところ、吾々はあれ以来、

たまに様子を見に出かけるこ
とにしている。ひとまずその
時の話。

「タマさん、ちょっといいで
すか」とコロちゃん。「何だ
にや」「ボクたちは「イエネ
コ」っていう種族なんですよ
ね?」「そうだにや」「種族とい
う形でひとくくりにまとめ
あるということは、共通の特
徴がボクたちにはあるとい
うことだにや」とやりとりを
していると、隣で聞いていた
チーちゃんが「何やのこの子、
タマちゃんの病気が伝染した
んか。小難しそうな話しよる
わ」と突っ込むが、コロちゃ
んはそんな事お構いなしだ
にや。幼いにやがらも、いや、
幼いからこそ、この数週間吾々
と話したことを吸収してか、
グングン色んなことを学んで

いるようだにや。

「そういう種族の特性という
ものは、ボクという個体には
逃れようのない桎梏(しっこ
く)として存在すると考えてよ
いのでしょうか?」「君はどう
思うかい?」「ボクはライオン
やトラにはなれませんが、
生物種として越えられニヤい
限界があるのだと思うのです」
「そうだにや」「でも自分の夢
想の中では、背中に翼が生えて、
天国のママのところへ飛んで
行けるんではニヤいかと思っ
てしまうのです」「まだまだ子
どもやなあ。可愛いところも
あるやんか」

「それが夢想だと自覚してい
る時点で既に、君は限界を認
めているわけだにや?」「ああ、
確かにそうですね」「そういう
意味でも、Physical(物
理的/身体的)な限界という点

で、種族にとつての普遍的な桎梏というのはあるわけだ」「なんやもう、難しい話やめてえな」と、こんな話に関心のないチー子是不満げである。

「ただ、吾々の種族の存在意義みたいな点で、『普遍的な意味』みたいなものは決まっているのだろうか」と吾輩は投げかける。「??」「つまり、コロちゃんがいエネコという種族に属していることで、自動的にその存在意義が決まってしまうのだろうか?、ということだにゃ」「なんや、それって結局個性によつて存在意義が違ふってことやないの?」「その前に、個と種族の間を媒介するものが何かあるような気がするのですが」とコロちゃん。「何があるかにゃ?」。さて、読者諸子、どうだろうか?

「われわれにとって無視しえ

ぬ大きな他者として存在する、人間との関係を考えてみるにゃあ」「はい」「イエネコと人間との関係性に、普遍的な決まりはあるだろうか?」「ボクはほとんど人間と接したことがニヤいので、よくわかりません」

「なんやこれも飼い主の個性で変わってくるって話やないの?」「個性と言つてもいいけど、むしろ」「何やの?」「そのネコとその人との個別の関係性という問題が一つあるにゃ」「そうやね」でも、必ずしも個別の関係性だけに解消できないヤい問題もありそうだにゃ」「どういうことですか?」「文化とか地域の特性と言われるようなものがあるにゃ」「日本文化と中国文化では、ネコの位置づけが違ってくる、みたいなことですか?」「おおざっぱ

に行つてしまえばそうかもしれないニヤいが」「が?」「例えば、周囲にイヌが多い地域とそうでニヤい地域、あるいは人間にとつてほかに重要なパートナー的動物がいるか否か、吾々の敵となる動物がいるか否か、などによつて、吾々ネコが持つ位置みたいなものに違いが出てくるにゃ」「そんなもんか?」「『文化』みたいな言葉は便利な反面、色々なものを見えニヤくしてしまいかねない。だから、具体的な関係性や歴史的背景を考えていくことが大切だにゃー」とても面白いです」

「ローカルで具体的な関係性の中で様々なものの価値づけに違いが出る、ということが起こるわけだにゃ。しかしこれは逆に、ローカルな視点だけで閉じて考えてしまうこと

が危険だということにもつながっているけど、わかるかにゃ?」「ぜんぶ違つて、全部バラバラやったら、ネコなんてくくりいらんわ」確かに、そういう意味で先の種族的、生物的境界で考えると、やっぱりネコというくりに意味はあるのだろうか。ただ、それよりもはつきりとした別の問題があるにゃ」

「二つの視点を一般化してしまふ問題でしようか?」「それもあるにゃ。例えば、吾々日野のネコだけを見て、ネコはどうだとか、日本のネコはどうだとかわかつたつもりになつて一般化することが問題なのはわかるにゃ」「はい」「それだけでニヤく、吾々ネコにとつて、日野とか三多摩といった地域でくくりにどれだけの必然性があるのか、という点こそ、

『ローカル』と『普遍性』のような問題を考える際に本質的な意味があるにや」「ああ、なるほど」

ちなみに読者諸子、当然、地方自治体という制度的に確立された区切りに重みがある人間の世界で同じには論じられニヤい。でもある地域スケールなり地域の境界線が何のためにあるのかを、根底から考えるのはやっぱり大切なことなのだにや。

* * *

先述のとおり、吾輩がこうした話を考えた一つのきっかけは、中越と東北へ行ったことだったにや。「震災復興」という、地方自治にとって重要な問題とつながることだにや。ちやうど『緑の風』のいつもの面々が事務所に関連した話を後日しておった。

「八月末に新潟の中越に行っ

てきたんですけどね」と、坊主頭のK氏が言う。Kという名前はそつちのほうにルーツがあるらしく、こやつが中越に行くといので、吾輩はお守役で一緒に行ったのである。「二〇〇四年の中越地震に関連した場所や、被災と復興の記憶を伝える施設をまわってき

たんですよ」「へえ」「正直以前は、中越地震の重要性をよくわかっていなかったんですが、東日本大震災について考える中で見た論考で、『なるほど』と思った図がありましたね。中越地震の復興に現場ですつと関わってきた方が書いたものです。ここで『右肩上がり』は経済成長を前提とできた時代、『右肩下がり』は、経済成長が現実的に困難となった時代です。右肩下がりの今だからこそ、お金の換算できない価値

価値の重要性が高まっているわけですよ」「なるほど、こうして整理してみると、三つの災害の性格の違いがよく分かりますね。熊本は中越に近いのか、東北の地震被害に近いのか」と、ジムキョクチョーは興味津々である。

「こうしてみると、人口減少が激しい農山(漁)村の復興のリーディングケースとして、中越の復興は意味を持つのだな、と、これを読んで思ったわけですね。経済成長を前提としない中で『復興』の意味をきちんと考えるための重要な例が中越にはある、と思うわけです」。この話は続くのだにや。



長岡市川口にある「震災メモリアルパーク」。後ろに見える棚田の二段目に、中越地震(2004年10月23日)の震災(震災の真上の地表部分)がある。

	災害の種類	地域性	時代背景
阪神・淡路大震災(1995)	地震	都市	右肩上がりと右肩下がりの時代の端境期?
新潟県中越地震(2004)	地震	地方	右肩下がりの時代
東日本大震災(2011)	地震 津波 原発事故	①都市 ②地方 ①都市 ②地方 ①都市 ②地方	右肩下がりの時代

図 三つの災害の種類、地域性、時代背景
(稲垣文彦「東北へのエール」『世界』2015年4月号。稲垣ほか著『震災復興が語る農山村再生』コモンズ、2014年にも、若干表記が異なるが掲載されている)

【地域包括ケアの現状と課題】

地域の人たちを 支えるために

お話：株式会社ラピオン しばた みなこ
代表取締役 **柴田 三奈子**さん

インタビュアー：『緑の風』編集部

インタビュー 2016年1月8日



2014年に成立した「医療・介護総合確保推進法(地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律)」によって、医療・介護改革が各自治体で進められています。その中でも、これから重要になってくるのが「地域包括ケア」です。多様な高齢者に対しての支援やサービスが求められてきます。(『緑の風』2015年10月号参照)

そんな中、日野市内で「住み慣れた地域で最後まで安心して生活できる」ことを実現するために、看護・リハビリ・介護職が協働し総合的なサービスを提供している会社があります。今回は、その代表取締役である柴田さんに『緑の風』編集部がインタビューをしてきました。

編集部 まず株式会社ラピオンの訪問看護部門である山の上ナースステーションをどのような目的、経緯で立ち上げられたのかをお話しいただきたいと思います。

柴田さん もともと日野市内の訪問看護ステーションで管理者として九年間ほど務めていました。その時から、訪問看護は二四時間三六五日動けるところでないと、地域の人たちを支えることができない、という思いをずっと持っていました。しかし、前の職場では、二四時間体制にするのが難しかったり、休日を出勤にすると職員に負担がかかるので、そういうのはやめようとか、あまり大変な人は取らないようにとか、そういうことを方針として言われたこともあって、退職することにしました。

辞めて、自分でやるしかないのかなとなった時に、どうせやるなら三六五日ちゃんと動ける訪問看護ステーションを作ろうということと、二〇〇九年七月に山の上ナースステーションを開設しました。立ち上げの時から二四時間三六五日体制で訪問するナースステーションでした。当時このシステムは画期的で、都内や全国的にみても、三六五日動けるところがなかったのです。ですから、色んなところに注目されました。今では少し増えてきています。地域の中からも、すごく需要があったので、一気に利用者さんが増えて、急激に大きくなったというのが経緯です。

編集部 現在は、どのような規模で運営されていますか。

柴田さん 現在、利用者さんの数が三五〇人程度で、看護

師が常勤と非常勤とそれぞれありますが、人数だけですと五人、リハビリスタッフが九人ほどいます。

現在、国の方針は、訪問看護ステーションを大規模化して、このように三六五日柔軟に対応できて、在宅の看取りをどんどん進めていこうとしています。他のところでも訪問看護ステーションを大きくしようという動きがあるのですけれど、なかなか人材が集まらない現実があります。

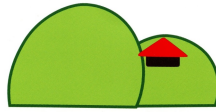
編集部 前にお勤めされていた訪問看護ステーションでも、二四時間三六五日体制の実現は無理だったとおっしゃっていました。こちらの訪問看護ステーションがその体制を実現できたのは、なぜですか。

柴田さん 自分の思いみたいなのを表面に出しました。こういうことをやっていきます、ということを発表したので。例えば、ガンの末期の人等、医療ニーズが高い人を重点的に看ますよ、そういう人たちを私たちは支援しますよ、という形で表に出しました。そうしたら、そういうことをしたいという看護師さんたちも集まってきたという状況だと思います。立ち上げてすぐの頃は人材不足なども悩みの一つでしたが、最近は大きくなった分、人も集まりやすくなったので、順調に増えています。

編集部 他の施設と比べて、仕事内容がハードだったりすると思うのですが、看護師さんたちが、あえてハードなどころにお勤めされるのは何ででしょうか。

柴田さん この施設は、仕事の中身がハードだったりする

株式会社ラピオン



YAMANOUE

【訪問看護】

【居宅介護支援】

◆山の上ナースステーション

- ・看護部門
- ・リハビリテーション部門
- ・教育ステーション

【訪問介護】

◆山の上ヘルパーステーション

【通所介護】

◆森の木リハビリステーション

【賃貸住宅】

◆在宅サポートハウス山の上

◆セミナー事業部

山の上ナースステーション

<http://www.yamanoue-st.com/>

042-843-2881

分、きちんとお給料やお休みを確保するようにしています。例えば他の施設だと、なかなか有給等も取れないし、夜間の緊急訪問で呼ばれた時に、代休をとったりするのが難しかったりするんですが、そういう形ではなく、きちんと働く人が働き続けられる形をとっても努力して整えています。

編集部 国や地方自治体の助成金を活用したりして、その形を実現しているのでしょうか。

柴田さん いいえ。助成金等はありません。、通常の訪問

看護等を一生懸命やれば売り上げも上がるので、この部分で還元していくということです。あとは、やりがいにつながれば、人は辞めないのので、自分がやりたいことが、もしここにあればハードでも続けられると思います。

編集部 法人（株式会社ラピオン）としては、主にどのような事業をされているのでしょうか。

柴田さん 私が今、メインでいるのが訪問看護部門ですが、その他に居宅介護支援、訪問介護、通所介護、賃貸住宅等をやっています。

訪問看護部門には、リハビリテーション部門もあったり、東京都の教育ステーションというのがあって、地域の訪問看護ステーションの方を育成するという役割を担っているところもあります。この教育ステーションは都内にまだ九ヶ所しかありません。潜在看護師さんや病院で働く看護師さんで訪問看護をやってみたいという看護師さんたちを受け入れたい、訪問看護ステーションで働く方を受け入れたい、事業の六割程度が訪問看護部門になります。

居宅介護支援事業では、ケアマネージャーさんたちがいて、介護サービスを利用するにあたっての窓口をしています。要介護認定申請の代行やケアプランの作成を行っています。ここでは、利用者だけでなく、ご家族の相談にも応じて、アドバイスをしています。通所介護では「自分らしく生活する」ことを目標にしたリハビリテーションに特化したデイサービスを二ヶ所で行っています。また、訪問介護部門では、二四



「自分らしく生活する」という目標に向けたリハビリステーションに特化したデイサービスをおこなっている「森の木サービスステーション」のみなさん

時間三六五日、介護生活を支援しています。さらにセミナー事業部を設けて、医療・介護従事者や地域の方々向けに介護に関するセミナーを定期的に行っています。

そして、事業の中でも特徴的なのが、賃貸住宅です。「在宅サポートハウス山の上」といって、医療ニーズが高い人やガンの末期の方、在宅はちよつと難しいとか、介護者がすごく大変だという方々を支援するために立ち上げました。一三部屋ある建物で利用者の方にそこで生活してもらおうという新たな試みです。この建物の中に、訪問介護部門が入っています。また、ヘルパーさんが二四時間サポートしています。主治医や訪問看護部門の看護師さんは、定期的に通うようになっています。また、介護等しやすいように整備された部屋になっています。

サービス付き高齢者向け住宅や介護老人保健施設等は、日野市内にも沢山あるのですが、医療的なニーズが高くなると受け入れてもらえません。ガンの末期等でも、なかなか看取りというものが敬遠されてしまっています。そういった他のサービスでは担えない部分をまかなうという考え方でやっています。他のサービスを受けられる人はそちらへいってもらう、ここしか行き場がないんだという人たちを受け入れていきます。

編集部 「在宅サポートハウス山の上」に入居したくて待機されている方は沢山いらっしやいますか。

柴田さん 結局、誰かが亡くなったりしない限り、次が入れないので、待機はしてもらっていません。いつ入居できるかがわかりませんので。ただ、お問合せは沢山あります。タイミングよく空いている時にお問合せがあれば、すぐに入れます。

編集部 様々な事業を展開されていますが、その中でも特に問題となっていることはありますか。

柴田さん 一番は、看護と介護が協働することについてです。今、国の方針としては医療と介護の連携・協働等を進めていると思いますが、現実問題として、そこが一番の課題です。同じ法人の中でも、コミュニケーションが取れないとうまく回っていきません。同じ建物の中にみんながいれば、もしかしたらもうまくいくかもしれません。なかなか物理的にはなれていたりもするので、お互いがお互いを理解しあえていないというか、そういうところがあります。お互い歩み寄りをしていかないと、と感じています。時間が経てば、少しずつよくなっていくとは思っています。ここでは、在宅サポートハウスを始めてからまだ一年半くらいしか経っていませんので。あとは、ヘルパーさんたちが医療ニーズや看取り等の経験が少ないため、とても不安があったり、大変だといって、人が定着しにくい点があります。要するに人材確保や人材育成といったことが一番大変です。



「在宅サポートハウス山の上」は、医療ニーズの高い人やがんの末期の人等が生活する介護・看護付賃貸住宅。

編集部 看護師さんやヘルパーさんにとって働きやすい環境を整えられているということで、看護部門では人材確保や人材育成が成功しているのですかね。

柴田さん 看護部門では、人は入ってきますが、辞めている人は少ないです。大変だから、内容が辛いからと言って辞める人はほとんどいません。だから、看護部門はどんどん大きくなってきたと思います。ヘルパーさんたちに関しては、辞める原因が不安だったりとか、業務がハードだったりとか、そういうことがあるということがわかってきたので、そこはフォローしていて、少しずつ辞める人が減ってはきています。

編集部 現在、ヘルパーさんの立場自体が社会的にちゃんと確立されていないということがありますが、こちらの法人で、ヘルパーさんに対して工夫されていること等はございますか。

柴田さん せっかくこの法人に来てくれたのだから、ヘルパーさんたちにもスペシャリストになつてもらいたいと思っています。ここでは、看取りや医療ニーズに対応するという他ではできない経験をするわけです。同じ法人の中に、訪問看護ステーションがあるというのも、看護師と一緒に働くという意味では、メリットが大きいと思うので、学習会や事例検討などを通してスキルを上げていくということをやっているかとは思っています。

あとは、二〇一六年一月から、東京都に申請して、

ヘルパーさんの喀痰吸引の教育機関になりました。うちのヘルパーさんだけではなく、地域のヘルパーさんたちに喀痰吸引や経管栄養について、ここで指導をして、人材を育成していくという教育機関の登録をしました。そういう意味では、少しずつ、自分の法人内だけではなくて、地域のヘルパーさんたちにも還元していけたらいいと思っています。

これからの世の中を考えると、看護師だけでは、どう考えてもこの在宅生活を支えることはできません。うちの看護ステーションの看護師の数なんて微々たるもので、そう考えると医療的な側面をもったヘルパーさんの育成がすごく必要なんだと思っています。そこは早くやっつけていかないといけないと考えています。

編集部 様々な事業を展開されていて、看護部門一つとっても相当ハードだと思われませんが、さらに教育も、となるとかなり大変だと思うのですが、そのあたりはどうお考えでしょうか。

柴田さん 訪問看護部門が管理者が私ではなく別の人がやっているのです、少し私に時間的な余裕ができてきました。今までは、ずっと自分が中心になって必死でやってきたので、なかなか難しかったのですけれど、これからは自分の身体をナーステーションから外して、他の部門の教育や地域との連携等に力を入れていくのが必要な、と思っています。



「在宅サポートハウス山の上」の廊下の一角

編集部 近くにこういう施設やサービスがあるのは、大変心強いと思いますが、ニーズが多すぎて、いざ利用したいという時にちゃんと利用できるのかという不安があります。

柴田さん 基本的には、相談があった時にはお断りすることはありません。在宅サポートハウスだけは数が限られているので、どうしてもお断りする時がありますが、他に關しては断ることはありません。まずは相談にのって、少しずつ関わっていくと、その時々状況等にスムーズに対応できるというのがあります。ですから、まずは色んなことを相談してもらおうことが必要だと思っています。

編集部 地域内で同じ事業をしているところとの連携等がありますか。

柴田さん 訪問看護に関しては、日野市で日野市訪問看護協議会というのがあり、定期的に集まっています。例えば、一つの訪問看護施設が閉鎖になりましたといった時に、この患者さんを、それぞれで分けたりとか協力体制をとったり等はやっています。困っていること等、相談にのり合ったりしています。また、自分のところは利用者がいっぱい難しいけれど、一緒にやってくれたら、この人がみれるという時には、二ヶ所の訪問看護ステーションが一人の患者さんを看たりということもあります。

編集部 多摩地域全体でみた時に、医療・介護等の環境について、地域的なばらつき等はあるのでしょうか。

柴田さん 日野市の特徴は、おそらく医療機関が少ないということがあります。急性期の病床数が大変少ないのです。全国の平均から見ると、三五%くらいしか充足されていません。療養型の病床数も全国の平均より少ないです。有料老人ホーム等の施設関係が平均より少し多いくらいです。ですから、日野市は在宅の医療やサービスが充実してきたという背景があると思います。日野市は医療ニーズが高い人たちも在宅で生活できる地域ではあると思います。

全体的に在宅サービス自体は徐々にレベルがあがっていると思います。私を感じているのは、日野市は比較的、訪問診療をしてくれる先生を含めて、現場のみんなががんばっている気がします。「無理だね」とか「それはできない」という言葉を聞いたことがありません。

今、私がやらなくてはいけないと思っているのは、医療に関する市民の相談窓口をつくることです。

介護については包括支援センター等、色々なところがあると思います。しかし、私は看護師なので、ガンになってしまっただうしたらいいかわからない等、途方に暮れる人たちが沢山いて、そういう人たちに早い時期から、相談できる場を提供したいと考えています。無料で相談できる場、よりどこをみたいかな、あそこに行けばいいアドバイスがもらえるかもよ、相談にのってもらえるみたいよ、というところをつくらなければいけないと思っています。



「在宅サポートハウス山の上」個室内のトイレと洗面所

病院の先生は結構極端じゃないですか。「これしかないですよ」とか言われると、選択の余地がないというか。でも実際はそんなことはなくて、本当は選択の余地はいっぱいあるのに、病院の先生は、家が無理となると「じゃあ転院だね」になってしまいます。それではよくないと思います。

医療に関する市民の相談窓口は、これからますます必要になってくると思います。市民の人たちが考え方を変えていかなくてはいけない時代がくると思うのです。介護している年代の人たちに、何かあると病院にとか、最後の時は病院に預ければ、といった考え方、これからは死んでいく人がどんどん増えていくし、高齢化して病院が足りなくなるわけだから、何かあっても病院じゃなくて自宅で過ごさなきゃいけないわけですから、時代的に言うとも、仕方なく生活するのではなくて、自分が自ら進んで在宅で生活してほしいのです。

そういう考え方を変えていくことをしないと、いけないので、病院が一番じゃないんだよということだったりとか、自分が過ごしたいように過ごせばいいんだよとか、死ぬのは病院じゃなくてもお家でも死ぬんだよとか、そういうことを地域に広めていきたいと思っています。

編集部 実際の問題として、在宅看護や介護が必要になった時に、経済的なことも含め在宅サービスが受けられるのか、どこまで在宅で可能なのか、そのあたりがわかりません。

柴田さん 在宅でできるのかどうかということこそ、これから先は考えを変えていかなくてはいいけな

いと思うのです。在宅で点滴等、ある程度のことではできませんが、どこまで治療するのか、ということ

を考えるということだと思います。これは自然の流れなんじゃないのということとかを、私たちが身につけなくてはいけない知識だと思うのです。

平均寿命はすごく伸びてしまったけれど、実際には、伸びたということイコール治療して生き延びられるようになったということだと思ふのです。昔はよかったよねという話は、平均寿命は短くて、要するに治療しないから、家で死ねたということなのだと思ふ

す。だから、入退院を繰り返して三年も四年もがんばっている人たちがいるから寿命が長くなったので、みんな幸せかっていうとわからないじゃないですか。なかなか

難しいところではあります。

編集部 現場をよくご存じの柴田さんは、今の医療が自然の流れに逆らって、延命治療のようなことが多く、幸せに長生きして暮し人が減っていると思いませんか。

柴田さん 思ったり思わなかったりです。この人はもう十分じゃないかなと思う人に治療等をされていて、もう必要なんじゃないかなと思うこともあるし、今ここでもう少し治療をすれば安定して長生きできるんじゃないかなと思う人に治療はしないと言われると、もったいないなと思うこともあります。

編集部

ケースバイケースということですね。私たち素人



にとつては、その見極めがとても難しいと思います。

柴田さん そういう時に相談窓口があると、ひとつずつ解決していけるのではないかと思っています。

山の上ナースステーションだけががんばっても、日野市全体の力量が上がるかと言ったらそうではないので、自分たちが関わっている部分だけではなく、良いものが地域の中で広まれば良いなと思います。例えば相談

窓口をつくるとか、市民講座で市民の考え方を

増やしていくとか、地域での在宅・施設での看取りを変えていくとか、そういう取組みを今後、計画していきます。私は現在、大学院に通っていて、それらを研究のテーマにしています。小さいながらも相談窓口や市民講座はやってみようと思っています。少しずつ、新たに色々な取り組みができればいいな思っているところです。

来年からは地域包括ケアの実現に向けて取り組んでいきたいと思ふます。地域包括ケアは、住民の方々がどう生きていくのか、というのをまず考えられるようになり、言えるようになる、というところが基盤にあつて、その上に生活の基盤の住まい・予防・介護・医療等があるという考えです。まずこの基盤に手をつけていけたらと考えています。その上にあるサービスの部分にも手をつけて、みんなが困らないようにするためにどうしたらいいかという、相談できる場所をつくる。地域包括ケアを実現させるために動いているといった感じですよ。

(了)